係り受け解析を用いた助詞の後に打たれる読点の傾向分析

情報科学科　善久　梨帆　　指導教員：山村　毅

1　はじめに

読点は，文章を構成する中で重要な役割を担う．しかし，読点挿入の条件は明確に定義されておらず，人はこれまでの経験から，読点挿入位置を決める．読点は，文中の様々な品詞に打たれ，中でも読点が打たれる品詞として助詞がある．助詞は，付加する語句と他の語句との関係を示す重要な品詞であり，数種類に分類される．助詞が数種類に分類できるように，助詞に打たれる読点も，数種類に分類できるのではないかと考える．

本研究では，係り受け解析を用いた調査を助詞の種類毎に行い，助詞の後に打たれる読点の性質を分析することを目的とする．

2　調査内容

本調査で扱う助詞は，格助詞・接続助詞・係助詞・終助詞・副助詞・副詞化・連体化・並立助詞・副助詞/並立助詞/終助詞・特殊の十種類とする．係り受け解析を用いて，係る文節数，係り受け距離の二つの観点から，助詞と読点の関係を調査した．

係る文節数の調査では，ある文節 A に係る文節数を，文節 A の「係る文節数」とする．数え方は，直接係る文節のみ数える方法と，間接的に係る文節も含めて数える方法の二通りとした．読点の有無で，係る文節数に差があるかを比較した．また，読点が打たれる場合，係る文節数は文中で何番目に大きいかを調査した．この際，係る文節数が文中で最大となりやすい文末は除外した．

係り受け距離の調査では，ある文節 A の係り先である文節 B が，文節 A から見て何文節先にあるかを，文節 A の「係り受け距離」とする．読点の有無で，係り受け距離に差があるかを比較した．加えて，助詞を含む文節とその直後の文節の係り先を比較した．読点の有無で，係り先に差があるかを調査した．また，読点が打たれる場合，係り受け距離は文中で何番目に大きいかを調査した．

3　調査結果

対象データは，1991 年から 2009 年までの毎日新聞の記事であり，総文数は 18,603,921 である．なお，対象データの中には，文末が助詞＋読点という形になっている特別な文表現があったが，これらは除外した．

係る文節数を調査した結果，文節につく助詞によって，読点のある方が係る数が多い傾向を示すものと，反対に読点のある方が係る文節数が少ない傾向を示すものがあることがわかった．また，係る文節数を文中で比較した結果，係る文節数が最大あるいは２番目に大きい場合に読点が打たれることが多かった．

係り受け距離を調査した結果，読点のある方が係り受け距離が大きいとわかった．文節につく助詞によって，係り受け距離が小さく，直後の文節に係りやすくなる文節があった．直後の文節と係り先を比較した中で，連体化の場合の結果を図１に示す．連体化とは，前の語句が体言を修飾することを示す「の」である．図１より，全体では，直後の文節に係ることが殆どであることに対し，読点がある場合では，直後より先の文節に係ることが８割を占めた．また，係り受け距離を文中で比較した結果，係り受け距離が最大あるいは２番目に大きい場合に読点を打つことが多かった．

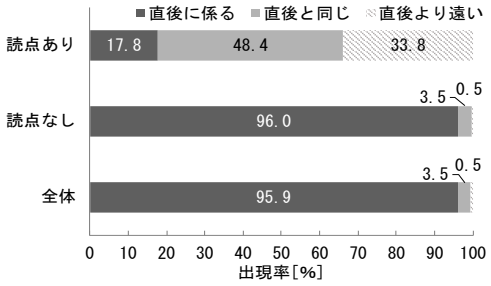

図１. 連体化を含む文節と直後の文節の係り先の比較

4　考察

助詞の後に打たれる読点は，次の 4 種類であると考える．

(1) 係る言葉が長いことを示す点

体言や用言に係る文節では，読点のある方が係る文節数が多い傾向が見られた．よって，係る文節数が多い場合に読点を打つと考える．

(2) 句点の代役を担う点

終助詞のような，文末に含まれやすい助詞を含む文節では，読点のある方が係る文節数が少ない傾向が見られた．よって，文末に含まれやすい助詞が文の途中に現れる時，その直後に句点のように読点を打つと考える．

(3) 意味の切れ目を示す点

読点のある方が係り受け距離が大きいことから，係り先が遠く，意味が一度切れる時に読点が打たれると言える．特に，連体化のような係り受け距離が小さい文節は，係り受け距離が大きい場合，誤ってすぐ近くの文節に意味を繋げないよう読点を打つと考える．

(4) 強調する点

係助詞は，格助詞を言い換えて題目として文中から取り上げる為，本質的に係り受け距離が大きい[1]．従って，係助詞を含む文節は，係り受け距離が大きい場合，意味の切れ目を示すより，示した題目が途中で弱まらないよう強調する為に読点を打つと考える．

5　まとめ

調査の結果，助詞の後に打たれる読点は，係る言葉が長いことを示す点，句点のように内容をまとめる点，意味の切れ目を示す点，強調する点の４種類だと考えられる．今後の課題として，更に助詞を分類した調査等が挙げられる．

参考文献

[1]三上　章（1990）「象は鼻が長い」，くろしお出版．